

あしたの教育を考える

教育最前線

Education Vanguard

創刊号

巻頭言

「ことばと教育」の
出版社をめぐって！

株式会社三省堂代表取締役社長

北口克彦

特集

これからの教育

堀田龍也

東北大学大学院情報科学研究科教授

高木展郎

横浜国立大学名誉教授

根岸雅史

東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授

【三省堂の歩み】

ことばを
見つめて
137年

「ことばと教育」の 出版社をめざして！



三省堂は一八八一（明治一四）年四月八日、神田神保町に古書店として開業しました。店名は、『論語』学而篇の「吾日三省吾身」から選び、「三省堂」とします。

創業後まもなく出版事業を始めます。当初は数社が資金を出し合う同盟出版でしたが、一八八八（明治二一）年に『ウェブスター氏新刊大辞書と訳字彙』を初めて単独で刊行し、それ以後、旺盛な出版活動を展開します。

早くから教科書編集にも取り組み、一八九二（明治二五）年には『中等教育日本通史』を発行します。英語教科書は一八九九（明治三二）年、中等学校用『ニューセリースリーダー』、一九〇〇（明治三三）年『小学リーダー』、一九一六（大正五）年には現在当社の代表的書名となっている『クラウン』を冠した『クラウンリーダー』を発行していきます。国語教科書は、一九二〇（大正九）年の『中等国文教科書』を皮切りに、一九五〇（昭和

二五)年『金田一中等国語』、そして『現代の国語』と続きます。

おかげさまで、三省堂は今年で創業一三七周年を迎えました。この間、幾多の困難がありながらも、日本における近代出版の黎明期から、明治・大正・昭和・平成、そして来たるべき新元号の五代にわたり、辞書出版・教科用図書出版を中心に「ことばと教育」の出版活動を続けることができましたのは、読者・教育界の皆様からのご愛顧の賜物と深く感謝しております。

今日、紙とデジタルが共存し、お互いの特長を活かすICT時代にあって、出版業界・教育界を取り巻く環境は大きく変化してきていますが、常に時代をリードする「新しき」、読者本位の「使いやすさ」、そして「本物」を追求する情熱を持ち、今後も、「ことばと教育」の出版社として、日本の教育と文化に貢献していきたいと念願しております。

株式会社三省堂 代表取締役社長

北口克彦



特集 これからの教育

これからの情報教育



堀田龍也

(東北大学大学院情報科学研究科教授)

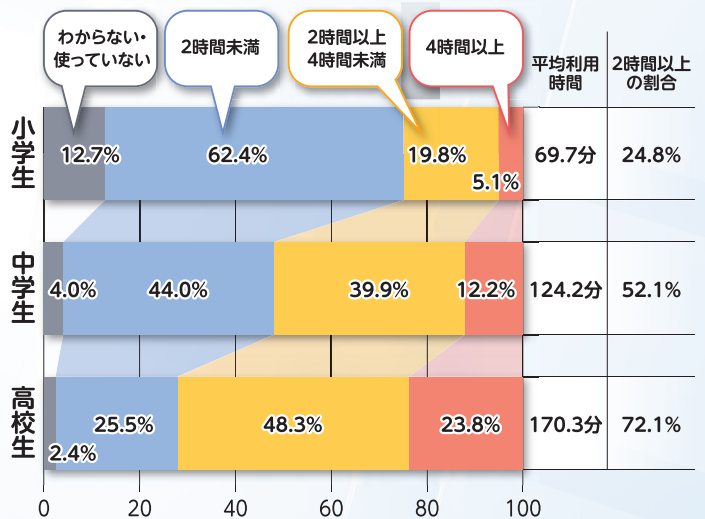
1. 生活が情報化する

スマートフォン（以下、スマホ）はとても便利だ。どこかに出かける際は事前に検索し、行き先の情報を先に入手することができる。新幹線や飛行機の切符、ホテルなどを予約することもできる。現地では地図やナビを頼って歩くこともできる。美味しい地域の食事場所を探すこともできる。先方で会う人た

ちとメッセージ交換もできる。これだけ便利なスマホが広く普及しているのは当然のことだろう。（グラフは内閣府による「平成29年版子供・若者白書」のデータをもとに作成）

スマホで切符やホテルの予約ができるのは、ネットワークの向こうにある予約システムのおかげだ。食事場所の紹介もまた、多数のレストラン情報が登録されたグルメサイトのおかげだ。私たちはこれらのシステムに助けられ、便利かつ効率的に日々の生

青少年のスマートフォンでのインターネットの利用時間（平日1日当たり）



〔出典〕内閣府『青少年のインターネット利用環境実態調査』（平成28年度）

活を送ることができている。その一方で、昔は人手で行われていたこれらの業務は次第にシステムに置き換えられ、それによって職を失った人や立ちゆかなくなった会社があるはずだ。職業の新陳代謝が起きているのである。

思い出の写真を記録したり、その発信や共有をしたりするなど、周囲と常にコミュニケーションしている私たちの日常。いざとなればスマホに頼るといふ生活をしている私たちは、スマホを忘れた時に少し不安になる。スマホに消費する時間が増えることにより、仕事上での行き違いや人間関係のトラブルもまたスマホを介して生じる確率が高くなっている。子供たちだって同じことだ。

情報技術は常に進化し、私たちは常に情報技術に支援され、社会はそれを前提に動いている。これが情報社会だ。ここに今後はIoTやAIなどの進化した情報技術が参入してくる。今は存在しているビジネスが消え、今は予想もできないビジネスが立ち上がる。それを中心になって支えていくのは、今の子供たちである。彼らが生きていくことになるのは、情報技術に高度に支援された社会。そこで必要となる知識やスキルとはどのようなものだろうか。

今回の学習指導要領改訂では、少子高齢化やグローバル化、価値観の多様化などの社会課題に対して、情報技術に高度に支援されることを前提に、社会を支える人材像が議論された。それが新学習指導要領に反映された。

2 産業が情報化する

たとえば農業においては、センサーを搭載したドローンが、ある農家の耕地の電子地図を把握しており、上空からセンサーで植物の生育状態を見極め、肥料や農薬の最適配分を計算し、最適な時期に計画的に蒔くというようなことが実用化している。このことにより、ある農家の生産効率の向上のみならず、その農家の周辺農家との協調的な農薬散布や、地域ぐるみによる環境への配慮なども実現する。さらにはこれらのビッグデータの解析により、気候条件と農作物の生産に関するよりきめ細やかな最適制御が実現し、限られた農業人材をいっどこに配置すればよいか計画できるようになる。

このように、たとえば農業の道に進むとしても、情報技術に関する理解や活用に関する学習を避けることができないということは、情報教育が特別なものではなくなり、どんな業種を進路に選んでも必要とされる教養教育として機能するということを意味する。

あらゆる仕事で情報技術を的確に用いていかなければならない時代を生きていくことになる子供たちには、コンピュータがどんな仕組みで動いていて、何ができ、何が苦手なのか、私たち人間はコンピュータをどう使っていくことが、より人間らしく生きていくことにつながるのかを知っておいてもらわなければならない。これは学校教育の役目である。

このことをよくわかってもらう最もよい方法が、プログラミング教育である。コンピュータに命令を与えて動かすことを体験し、また、うまく動かすために組み合わせを修正し、よりうまくいく方法を見つけて思いどおりに動かすということを体験することを通して、エアコンもロボット掃除機も、このように動いて私たちの生活を助けてくれているのだなということを理解することができる。中・高校生であれば理屈でわかることであっても、小学生は体験しないと理解しにくい。小学校段階からプログラミング教育が導入される理由はここにある。

3 これから求められる情報教育

生活が情報化し、産業が情報化する。しかも進歩の速度がさらに加速化する。このような時代に生きていく子供たちに求められる資質・能力は、情報社

会から隔絶された学校では到底身につけることはできない。

ゆえに、今のうちから1人1台の情報端末を導入し、生活や学習の場面で情報技術を道具として活用する学習環境を整えるのだ。問題解決の場面で、教科書や教師から得た知識をもとにしてチームで再検討し、伝える相手を意識して再構成させ、そこに込める自分の思いを言葉で明確化させるのだ。仲間とのやりとりの中で行き違いが生じ、それを言葉で解決することも含めて、情報技術を前提にした学習環境において彼らが学び取るべきスキルなのである。

ネットワークに繋がっていないスマホがあまり役に立たないように、ネットワーク無しの情報端末による学習環境は考えられない。新学習指導要領が想定するこのような学習イメージを、今の大人の貧困なイメージによって潰してはならない。子供たちの未来への価値ある投資を、そして我が国を、いや世界を支えていく子供たちの未来を、大人の都合で妨げてはならない。

「予算がないのでICTの整備が遅れています」という言葉を大人から聞くたびに、子供たちが支える私たちの未来への想像力がもっと必要なのではないかと痛感する。

PROFILE

専門は、教育工学・情報教育。主な著書に『だれもが実践できるネットモラル・セキュリティ』（三省堂）、『プログラミング教育導入の前に知っておきたい思考のアイデア』（小学館）等。

特集
これからの教育

これからの 国語教育



高木展郎 (横浜国立大学名誉教授)

1 国語の授業を通して 育成すべき資質・能力

国語の授業は、小学校六年間、中学校三年、さらに、高等学校でも三年間、習っている。にもかかわらず、大人になったとき、学校の国語の授業を通して、このような学力(資質・能力)が身に付いたと明確に回答できる人はどのくらい、いるだろうか。

小学校時代には、『スイミー』『ごんぎつね』『やまなし』、中学校では『トロッコ』『走れメロス』『平

家物語』『枕草子』、高等学校では『羅生門』『こゝろ』『源氏物語』などを習ったと言われることが多い。しかしそれは、教材名であり、具体的な学力の内容ではない。

これまでも、小学校、中学校、高等学校で育成すべき学力の内容は、学習指導要領に示されてきている。しかし、学習指導要領に示されている内容を、日々の授業でどのくらい意識して、授業が行われているだろうか。

学習指導要領の国語では、言語能力の育成を図る

ことが求められている。その内容も学習指導要領に示されている。

今回の学習指導要領改訂では、これまで国語の授業として意識的に行われることが余り多くなかった言語能力に焦点が当てられている。そのことは、今回の学習指導要領国語の小学校、中学校、高等学校の目標の示され方にも見て取れる。

この国語の目標に示されている内容が、小学校、中学校、高等学校において、それぞれ育成すべき言語能力としての資質・能力の内容を示している。そこには、例えば、具体的な文学作品の名前や説明的な文章の題名は、記されていない。示されているのは、各学年で育成すべき国語科としての資質・能力である。

2 教科書中心の 授業からの転換

日本の教科書は、教科書の掲載順に沿って授業を行うと、基本的には、学習指導要領が求めている国語の四領域の内容を、児童生徒にきちんと育成できるように構成が図られている。しかも、それは、小学校六年間、中学校・高等学校三年間という学校全体の教育年数のみではなく、学年毎の一年間というスパンの中でも、計画的に年間の教育課程が編成されており、教科書の順番に沿って授業を行えば、学習指導要領の内容の全てを、授業として行うことができるように作られている。

学校における国語の授業を行う際の教材としての内容・構成が、教科書には十分に備わっている。そのため、教科書の内容に沿って年間計画を立てれば、

学習指導要領が求める教育課程の編成を行うことができている。

しかし、実際の授業を行う時、国語の授業を通して育成すべき目標は、言い換えるならば、育成すべき資質・能力の内容を、どのくらい意識して、授業を行ってきたのだろうか。

これまで、教科書を使用したときに、教科書に掲載されている内容の理解や解釈のみに留まっていることは、なかったのだろうか。授業を通して、どのような学力（資質・能力）が育成されているかを、問うたことがあるだろうか。そこには、これまでも言われてきた「教科書を」と「教科書で」という指導の在り方そのものが問われている。

「教科書で」と言いながら、実際には「教科書を」教えてきた現状が無いだろうか。今、そこからの転換が求められている。それは、国語の授業においても、資質・能力の育成が求められているからでもある。

この転換を図るためには、教科書の順に沿った授業を行うのではなく、各学校の国語科独自に、学校毎に児童生徒に合わせた教育課程の編成を行い、各学校の児童生徒の実態に合った資質・能力の育成を図る授業を行うことが求められている。

3・国語の資質・能力の評価

これまで国語の授業を通して育成された内容を評価するのに、多くの場合、授業で扱った教材文を用いてのペーパーテストが行われることが多くあった。そのようなテストでは、授業内容の記憶の再生を問

うているに過ぎないのではないだろうか。そこから、授業で育成された資質・能力を十分に評価することができるのだろうか。

そもそも評価とは、昭和二三年の集団に準拠した評価（相対評価）により、評価とは、序列を付けるもの、という考えが日本の学校教育に根付いてしまっ

た。そこでの評価という言葉に含まれる意味は、「値踏みする」ことであり、点数によって序列を付けることが評価であるとする考えが、日本の学校教育に固定化されてしまった。

評価には、「支援する・支える」という意味もある。そこには、児童生徒を評価によってより良くする、という意味がある。評価観そのもののパラダイムシフトを行うことにより、評価は、児童生徒を今の時点からいかにより良くすることができるか。教育によって資質・能力の伸長をいかに図ることができるか。ということが、これからの時代の評価には、求められている。

そのためには、授業で何度も読んだ教材文を用いての評価ではなく、授業を通してどのような資質・能力が身に付いたかを問うことのできる評価が求められるようになってきた。

そこで、授業で学び、育成された資質・能力がどのようなものであるかを、授業で扱った文章ではなく他の文章によって、学習指導要領に示されている資質・能力が、授業を通して育成されたかを評価することが重要になってきた。

4・国語の資質・能力をいかに育成するか

先に、国語の授業を通して育成すべき資質・能力の内容は、学習指導要領に示されていると述べた。その資質・能力を、授業を通して、いかに育成するかが、これからの国語教育に問われている。

国語の授業では、言語活動を通して資質・能力としての言語能力の育成を目指している。

そこで留意しなくてはならないのは、「活動あつて学び無し」である。国語の授業は、活動が目的ではなく、言語能力を育成することにある。いかなる言語能力を育成するかを、教師も児童生徒も自覚することが重要となる。

国語の授業を通して育成すべき言語能力としての資質・能力は、年間を通して意図的・計画的に行わなければならない。そこで、各学校においては、学校教育全体の中で、言語能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントが重要となる。

カリキュラム・マネジメントは、年間計画としての国語科の教育課程の編成のみでなく、言語能力の育成に向けてどのような授業を行うのか、どのような評価を行うのか、ということを含めて、各学校が目指す国語教育の全体を俯瞰できるものでなくてはならない。

PROFILE

専門は、国語科教育学・教育方法学。主な著書に『変わる学力、変える授業。』（三省堂）、『チーム学校』を創る』（三省堂）、『平成29年改訂 中学校教育実践講座 国語』（ぎょうせい）等

これからの 英語教育

特集
これからの
教育

三つの波

根岸雅史

(東京外国語大学大学院教授)



「これからの英語教育」は、どうなるのか、皆目見当が付かない。私はA・トフラーのような未来学者ではない。しかし、私のような者でも、英語教育がいろいろな意味で大きな転換点にあるということはある程度の自信を持って言える。

●大学入試改革

まず、明確な転換点としては、二〇二〇年の大学入試改革がある。この改革自体は、大学入試制度全般の改革ではあるが、とりわけ英語にとっては、特別な意味を持つ。それは、大学入試における英語の四技能化である。

これまで日本の大学入試の英語は、もっぱら「読解問題」と「文法・語彙問題」が出題されてきた。

そのため、授業もこれらの問題解説のような授業が中心であった。高等学校が大学入試対策を目標に掲げるのであれば、訳読式の授業はある意味理にかなっていた。テストに出ることを教える、そして、テストに出ないことは教えない。

それが、来たる大学入試改革では、四技能化が図られようとしているのだ。これまでほとんど出題されてこなかった「話すこと」「聞くこと」「書くこと」といった技能を測定する問題が、入試で出題されることになる。

大学入試改革の議論の中では、「話すこと」の受験対策が、一部の英検受験予定者に施してきた「面接対策」のように語られることがあるが、これは間違いだ。これらの備えは、ほとんどの受験者に必要な備えとなるのだ。したがって、単なる取り出しの「面接指導」などでは対応できない。つまり、「授業」そのものが大きく変わらなければならないのである。

これらの技能の（受験に備えた）指導技術は充分に確立していないため、当面は、指導法は乱立する

であろう。四技能入試の大学受験者としての成功体験は、ほとんどの英語教師は持ち合わせていないのだ。

しかし、こうした混乱の後に、英語教師の訳読中心の指導観が変わってくることだろう。「聞くこと」「話すこと」の指導の取り組みにより、言語習得の「技術」としての側面に気がつくだろうし、「話すこと」「書くこと」の指導の取り組みにより、発信における「メッセージ」とその言語化の重要性に気づくであろう。これらにより、教師の指導観は、よりバランスの取れたものとなるはずだ。

こうしたバランスの取れた指導観が、従来の「読み・書き」の指導を、「言語形式」のみに焦点を当てたものから、「意味のやり取り」に焦点を当てたものに変えていくのではないか。

●グローバル化

英語教育に大きな変化をもたらすもう一つの要因は、世界の急速なグローバル化である。以前に比べれば、日本人海外旅行者数も訪日外国人旅行者数も急激に増加している。また、今後は二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックを契機に訪日外国人旅行者数はさらに増えるであろう。

私たちの学生時代には、街で外国人に出くわすことは滅多に無かった。ところが、今では、職場の同僚や生徒の中に外国人がいたり、ご近所さんが外国人だったりする。外食をすれば、店員やお客に外国人を目にすることも珍しくはない。

これは、何を意味するのか。それは、以前は、限られたエリートだけが経験していた外国人との出会いが、誰彼なく起こるということである。つまり、

これまでは、海外に行くようなエリートだけが、実際に英語（本当は「外国語」。以下は、リンガ・フランカとしての「英語」）を使うことが求められたが、これからはだれでも英語を使う可能性があるということである。街の人々は、学校で学んだ英語を使えるようにするために特別な研修を受けたりすることはない。学校で学んだ「素のままの英語」での問題解決が求められる。そうすると、学校英語教育の果たす役割は大きい。学校英語教育が社会の求める英語力をつけずに生徒を世の中に送り出すとなれば、学校英語は使えないとなり、ますます大きな不満となるであろう。

英語教育では、「第二言語としての英語 (ESL: English as a Second Language)」と「外国語としての英語 (EFL: English as a Foreign Language)」が区別されてきた。教室の外でも英語が話されているような環境はESLとされ、日本のように教室の外では英語が話されていないような環境はEFLとされてきた。しかし、世界のグローバル化により、日本のような環境もEFLとは言いがたくなりつつある。また、インターネットの世界では、もとより国境を簡単に越えていく。というか、国境を越えていることすら気づかないほどだ。

こうした世界では、英語「学習者」は最初から英語「使用者」となる。つまり、いつの日かできるようになって初めて使い出すのではないということだ。「使用者」ということは、何かの目的のために言葉を使った行動をするということだ。英語の授業やテストは、間違えれば減点される「引き算の世界」か

もしれないが、言葉を使うのは、「足し算の世界」だ。間違っても、使うだけ得るものがある。

外国人との直接的な交流の機会が増すことで、様々な気づきもたらされるであろう。今までにテレビやネットでは見たはずのことでも、現実に経験することはまったく違った意味を持つのだ。同じことに関する考えや、同じ場面における行動でも、かなり異なっていたりする。「世界の人たちはみんな違っていいなあ」とか、「こんな考え方やこんな行動もありなんだ」とか、考えるようになる。

もちろん、異質なものとの接触は楽しいことばかりではない。特に一緒に事を進めていかなければならないときは、大変だ。しかし、そこで、「違っているからおもしろい」とか「違っていいのかもしれない」とか「違っているのかもしれない」とか「違っているのかもしれない」とか、考えることができれば、なんとかやっつけていけるかもしれない。

● テクノロジーの発達

さて、最後に、英語教育に大きな変化をもたらす可能性があるものとして、テクノロジーの急速な発達を挙げておこう。

この数年だけでも、自動翻訳や音声認識の技術は、ものすごい勢いでその精度を上げている。教科書程度の英語や新聞記事や論文でも、かなりの精度で翻訳してくれる。しかも、翻訳結果は一瞬で返ってくる。この精度は今後ますます高まるだろう。音声認識の精度も、携帯電話で、多くの人がすでに実感しているところだ。

とはいえ、新聞や論文など、明示的な文章ならいいが、現時点では、文脈依存の発話の翻訳などは得

意ではない。また、笑いや皮肉の翻訳などはほぼ不可能だ。

実は、こうした翻訳テクノロジーと付き合うには、文脈に依存しないような明示的な日本語にして入力しなければならない。有名な「僕はウナギ」という文も、このままではI am a eel.と返してくるだけだ。音声認識の時に、不自然なくらいはっきりと話す必要があるのと似ている。

英語はこんな言語だからこう入力をした方がいいという感覚や英語を話す人たちはこんな場面ではこんな感じで話すというような知識を持っている必要がある。実は、こうした感覚や知識は、実際にその言語を学ぶことによってしか身につかない。また、こうした翻訳テクノロジーは、時にとんでもない誤訳を生み出すが、こうした誤訳に気づくのも皮肉にも、ある程度の英語力が必要なのだ。この意味でも、英語教育の果たす役割は大きい。

車の自動運転が話題になっているが、意味処理の苦手なコンピュータによる自動翻訳は、当面は車の運転アシストのような役割を果たさだろう。運転アシストの車に乗るには、車の免許が必要である。生徒たちが生きるであろう新しい時代は、世界の人々との共生と新しいテクノロジーとの共生が必要となってくる。

PROFILE

専門は、英語教育学。中学校英語検定教科書NEW CROWN English Series (三省堂) 代表著者。著書に、『テストが導く英語教育改革…無責任なテストへの処方箋』(三省堂)、『コミュニケーション・テストイングへの挑戦』(三省堂) など。

三省堂の歩み



ことばを見つめて137年

瀧本多加志 (株式会社三省堂 常務取締役 出版局長)

三省堂の開業は一八八一年（明治一四年）、本年四月で創業一三七年を迎えます。老舗であるがゆえに、その歴史を詳細にたどることは容易ではありませんが、創業以来一貫して、辞書、教科書、参考書を中心にした出版事業を展開し「ことばと教育」に深く関わってきたことは確かです。

本欄では、その「三省堂の歩み」の中で生まれた比較的近年の出版物を、ジャンル別に順次ご紹介してゆく予定です。第一回の今号では、一三七年の歴史を振り返り、伝統の中核とは何か、言い換えれば、出版事業の背骨として一本通っているものがあるとすれば、それが何であるのかを考えてみたいと思います。

私の見るところ、三省堂の出版事業は伝統的に、三つの大きな特長を保持していると思われれます。一つめは新しさの追求、二つめは積極的な技術革新、三つめは「下学上達」とも言うべき出版理念です。

●新しさの追求

近代日本の出版史において、三省堂はしばしば、時代の出版水準を自ら一挙に引き上げるような刊行物を世に問うてきました。とりわけ辞書

出版において、その傾向が顕著です。ここでは、そのほんの一例を紹介するにとどめますが、まず何と言っても『日本百科大辞典』を取り上げねばなりません。この大辞典は、日本初の本格的な百科事典で全十巻、一九〇八年（明治四一年）から一九一九年（大正八年）までかかって全巻完結しました。欧米の百科全書を翻訳出版するのではなく、英国の「ブリタニカ」に匹敵するものを目指し、困難を乗り越えてオリジナル編集を貫いた大事業です。

ほかに、後に三省堂の代表的ブランドとなる『袖珍コンサイス英和辞典』（一九二二年）、国語系語彙のほかに百科系語彙を収録した国語辞典『広辞林』（一九二五年）、戦後の小型国語辞典のルーツ（定型）ともいえる『明解国語辞典』（一九四三年）、初めての学習古語辞典『明解古語辞典』（一九五三年）など、同時代に存在していない新種の書籍を刊行してきました。

●積極的な技術革新

第二の特長は、技術革新の追求です。三省堂は、出版物の内容を良くするだけでなく、書籍という「物」を高性能化し、読者の利便性を高め

るために、技術革新に積極的に取り組んできました。詳述する紙幅がないのが残念ですが、辞書の重量を少しでも軽減するために薄く丈夫で軽い本文用紙インディアペーパーを開発し、精密で読みやすい紙面実現のために自社印刷工場を設立し、書体研究室を作って独自活字の設計を行い、自社専用活字を作り上げるなど、イノベーションのための新事業を次々に展開してきたのです。独自開発した「三省堂活字」は、現在もフォント化されて辞書に使われています。

●出版理念としての「下学上達」

三省堂という出版社は、当初より、英語がよく出来る人や漢学の素養のある人のための本を出してきたのではなく、英語や漢文の知識がない人が基礎から学ぶための本を出してきました。だからこそ、辞書、教科書、参考書が主要刊行物となってきたのです。この姿勢をよく象徴することばが「下学上達」です。

「かがくじょうたつ」とは『論語』に出てくることばで、『大辞林 第三版』によれば、「手近なところから学んで、次第に深い学問に進んでいくこと」という意味です。大正から昭和前期にかけて三省堂

を率いた第二代社長の亀井寅雄は、戦後間もない頃の回想録で、明確に「三省堂は高級専門の書を出す出版社ではない」という趣旨の事を語っています。この発言がすなわち「下学上達」という理念に通じるものだと考えます。つまり、辞書や教科書の編集には高度な専門性が必要とはいえ、それを一部の読者だけが理解できる高級専門の書に仕立てるのではなく、誰にでも理解でき、誰にとっても使いやすい形に改めた上で提供する姿勢を重視するということです。

●歴史を踏まえて開く未来

長い歩みを支えた三つの特長を未来にどう生かしてゆくか、それが今後の大きな課題です。小学校英語教科書への挑戦、電子媒体での出版事業の展開など、現時点における喫緊の業務を推進するに当たって、私たちは常に、先達が育んだ伝統を踏まえつつ、それを駆動力にして出版事業を展開してゆくつもりです。

PROFILE

「たきもと・たかし」一九八七年、三省堂入社。辞書・事典を中心に、幼児ものの「絵じてん」から、学術専門辞典の『言語学大辞典』まで、多種多様な書籍編集に携わる。二〇一〇年に出版局長に就任し、現在に至る。

抄録・三省堂137年の歩み

西暦	和暦	主な刊行物（辞書・教科書を中心に）
1881年	明治14年	4月8日東京・神田神保町で「三省堂書店」として開業
1884年	明治17年	英和袖珍字彙（同盟四社版として共同出版された最初の英語辞書）
1888年	明治21年	ウェブスター氏新刊大辞書 和訳字彙（単独出版の開始）
1899年	明治32年	神田乃武英語リーダーほか中学教科書多数
1903年	明治36年	漢和大字典
1904年	明治37年	小学英語読本（改訂）
1907年	明治40年	辞林
1908年	明治41年	日本百科大辞典第一巻（→大正8年〈全10巻〉完結）
1916年	大正5年	神田クラウン・リーダー
1920年	大正9年	ニュー・イングリッシュ・グラマー 中等国文・漢文教科書
1922年	大正11年	袖珍コンサイス英和辞典
1923年	大正12年	袖珍コンサイス和英辞典
1925年	大正14年	広辞林 明解英和辞典 ジェム英和・和英辞典
1926年	大正15年／昭和元年	キングズ・クラウン・リーダー
1927年	昭和2年	明解漢和辞典
1928年	昭和3年	三省堂英和大辞典 小辞林
1943年	昭和18年	明解国語辞典
1948年	昭和23年	ニュー・ヴィスタ・リーダーほか新制中学・高校教科書多数
1950年	昭和25年	金田一中等国語
1952年	昭和27年	辞海
1953年	昭和28年	明解古語辞典 新百科辞典
1959年	昭和34年	小学国語辞典 初級クラウン英和辞典
1960年	昭和35年	三省堂国語辞典
1962年	昭和37年	ジュニア・クラウンほか中学教科書
1967年	昭和42年	時代別国語大辞典・上代編 新漢和中辞典
1972年	昭和47年	新明解国語辞典 学習ジャンボ国語・百科辞典
1978年	昭和53年	クラウン仏和辞典 中学教科書ニュー・クラウンほか
1980年	昭和55年	例解古語辞典 表音小英和
1984年	昭和59年	例解新国語辞典
1987年	昭和62年	ニューセンチュリー英和辞典
1988年	昭和63年	大辞林 言語学大辞典第1巻 三省堂現代国語辞典
1995年	平成7年	大辞林第二版 三省堂全訳読解古語辞典 三省堂全訳基本古語辞典
1996年	平成8年	三省堂こどもことば絵じてん スーパー大辞林CD-ROM
1997年	平成9年	三省堂例解小学国語辞典 三省堂例解小学漢字辞典
2000年	平成12年	グランドセンチュリー英和/和英辞典 全訳漢辞海
2003年	平成15年	ウィズダム英和辞典 キッズクラウン英和辞典
2006年	平成18年	大辞林第三版 ウィズダム和英辞典
2008年	平成20年	エースクラウン英和辞典



SSD 三省堂

三省堂教科書・教材サイト <http://tb.sanseido.co.jp>

〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL (03) 3230-9411 (編集)・9412 (営業)

●大阪支社	〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地2-5-3	TEL (06) 6341-2177
●名古屋支社	〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31 協和丸の内ビル2F	TEL (052) 953-9211
●九州支社	〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1	TEL (092) 531-1531
●札幌営業所	〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ラスコム15ビル3F	TEL (011) 616-8722